

英語科・外国語活動を中心とした提言（若手 保彦 先生）

はじめに

令和6年度は、教科指導員として小学校2校、中学校2校の計4校を訪問、視察する機会をいただいた。例年と同様、私の話は「提言」と呼べるような立派なものではないが、せつかくの機会なので、訪問を通じて感じたこと、また今後の取り組みの方向性について、英語教育の立場から述べさせていただく。

学校訪問全体に関する感想

こちらは例年同じであるが、訪問したどの学校においても、廊下ですれ違う児童、生徒が元気に挨拶をしてくれる。先生方の日々の粘り強い指導の賜物であると思う。

学校経営説明では、各学校で特色ある目標が定められ、目標の実現に向けてチームとして取り組む姿勢を感じた。また特に今年度は、生徒が学校生活の中でどんなことをしているかが保護者や地域の人々にも分かるよう、ホームページに情報をアップしたり、頑張る生徒の姿をポスターにして校舎内に掲示するなど、管理職の先生方を中心に積極的な情報発信をしていることが強く印象に残った。

一般授業参観では、児童・生徒の興味・関心が少しでも高まるように、それぞれの先生方が発問や活動を工夫していた。また、教師からの説明や指示の際に電子黒板等のICTを活用する場面も見られた。教室に貼られた様々な掲示物からも、学習への意識を少しでも高めようとする姿勢を感じた。

特定授業のうち、特に外国語及び外国語活動の授業に関する感想

参観させていただいた特定授業では、どのクラスにおいても児童・生徒が生き生きとした表情で言語活動に取り組んでいる姿が印象的で、普段の授業においてもインタラクションが活発に行われていることが窺えた。背景には、活動中の児童・生徒の積極的なチャレンジを促す教師の言葉がけや的確なサポートがあると考えられる。活動の前の教師による説明やプレゼンもよく工夫されており、ALTがいる授業においては、彼らの存在が言語活動で重要な役割を果たしていた。

今年度訪問させていただいた小学校の外国語及び外国語活動の授業では、「行きたい国の魅力を紹介し合おう」や「ALTにプレゼントするために、“How many?”を使って聞いたり答えたりすることができるようになろう」というToday's Goalが設定されていた。これらの目標には「他者のために何かをしよう」という要素があり、児童の言語活動に対する動機付けにつながっていると考えられる。また、活動の結果他者から感謝される経験をすることで、児童が活動を頑張ったことへの充実感や自己肯定感を高めることが期待できる。

さらに、これらの授業においては、帯活動もメインの言語活動を円滑に行えるように工夫されていた。具体的には、行きたい国の魅力を紹介する授業では“Where do you want to go?”や“What can I eat?”、“What can I see?”などの表現を使ったSmall Talkが、数の表現を使ったやりとりをする授業では日本人教師がALTにプレゼントをするSmall Talkが展開されていた。帯活動はメインの言語活動と必ずしも関連している必要はないが、Small Talkがメインの言語活動のPre-task的な役割を果たすことで、メインの言語活動の時間を十分に確保できていた。

一方、今後の課題としては、モデルとなる会話の自然さが挙げられる。参観した授業では、

A: Where do you want to go?

B: Let's go to Italy (国名) .

A: What can I see?

B: You can see the Colosseum (見られるもの) .

A: What can I eat?

B: You can eat pizza (食べられるもの) .

A: Oh, great! Thank you.

というやりとりのモデルが示されていたが、2 番目の A の“*What can I see?*”という発言は旅行先での単独行動を示唆する表現である。直前に B が“*Let's go to Italy.*”と誘っていることをふまえれば、“*What can we see?*”のように“*we*”を使う方が（友好関係を維持する上では）より適切と考えられる。また、英語の初級者が実際に会話を行えば、次のようになる可能性が高い。

A: Where do you want to go?

B: Italy.

A: Why (Italy)?

B: Colosseum, pizza.

A: I see.

こういった会話はターゲットとする表現を使用していないものの、「行きたい国の魅力を紹介」というコミュニケーションの目的は果たしている。このようなモデルの提示は多くの単語や表現を覚えることが苦手な児童の学習負担軽減にもつながるため、選択肢の一つとして今後検討いただきたい（さらに言えば、本来人間のコミュニケーションは効率重視の傾向があり、関係が近くなれば後者の会話の方がより自然である）。

中学校の授業では、“*Let's tell what we do in an emergency.*”や「比較級、最上級の表現を用いて、2 つ以上のものを比べるクイズを作ろう」という目標が提示されていた。それぞれの授業の導入の段階では、ALT を含むティーム・ティーチングが行われた前者の授業においては災害時の行動に関する ALT の実体験の紹介が、日本人英語教員が単独で行った後者の授業では若い先生方の身長や年齢を比べるクイズが行われた。メインの言語活動を活発にするには、生徒の「知りたい」「伝えたい」というコミュニケーションへの意欲を高めることが重要であるが、いずれの授業でも生徒の興味・関心を引きつける工夫がなされていた。

授業の対象学年や指導形態など異なる点が多いため、両者に共通する課題は限られているが、今後の課題の一つとして、「相手意識」を高めることが挙げられる。例えば災害時の行動を伝える授業では、一般論としてのアドバイス（例：避難所に行く）よりも、ALT の状況（例：秋田市のどこに住んでいるか、家族がいるか、車を持っているか）を把握し、相手により役立つ情報を提供することができたと考えられる。同様に、比較のクイズを作成する授業でも、生徒の学区にある建物の高さや歴史を比べたり、公園の面積や避難所の大きさを比べるなど、防災や地域の学習につながるクイズを作ることで、生徒の実生活に役立つ情報を提供する機会になる。他教科で学習した内容を英語の時間でも活用することで、児童・生徒の学びをより一層深められるよう、今後の取り組みに期待したい。